



芭蕉翁附合集

四



芭蕉翁附合集巻之四

深川の夜

丁子も志はふ夢えかゝひもや

旅人

酒志の酒あけ此の月

芭蕉翁

友さうな旅宿屋ふりてつらん

合

理をともあれはる旅の又暮

人

親筆のたふしあ石半し

合

凡よ好く道も通る旅人

符

何事も長安は是名利の地
 醫の多きところ同く何れ
 いそぐと仲光の穴ふまじく
 ひそり世後やくちの泣死
 けりおちさく玄菟の山と傳へ
 是姑もくせぬる乃の弟海の
 るぬくやあまのりかぬきつや
 風竹あめあめの葉——
 人 籍 人 籍 人 籍 人 籍 人 籍

ももつうと登北出候もすくぬ
 物つるきき 舟海ありたり
 月と花咲る良の言根とわすて
 雲霞くくくく 此の札好き
 破産の釘打候るまの末
 んせらるるむきさ麦のひきり
 ちあきて被書お包ひ十寸鏡
 そのふひ居る結子の物ひ
 人 籍 人 籍 人 籍 人 籍 人 籍

苔の羽も刷カイウツクヒぬ飾しられ

去来

一吹風の歩れ系群る

翁

役川の釣うらぬき川群る

礼北

多ぬきとおきとに際張のう

史邦

まつと戸小苔這かろう春の月

翁

人小とくれと名物の梨

来

かきあつこの影はながうく秋着て

邦

そさかよひのうらたの是装

北

何事ともなきの也と志んうこ

来

星はくぬく午の貝みく

翁

ほつれより去来年の葉苑の志んく

北

芙蓉の花のそくところちる

邦

吸袖は先ゆもされしすんせん吉

翁

之星のまりの花とがく

来

けまし廬^ロ同^ク男^ヲ長^クありあ^らく
あしあつとさしう^ラ月の獲^トぬ
若^シふらう^ク花^ハあ^らふ^ル水^ノ汗^ニ
む^レそり^ハあ^らじ^シう^ラの獲^トぬ
いら^ハさ^らふ^ク二^ノの物^トも^ハ喰^テ盡^ス
あ^らふ^クふ^クさ^らさ^らと^ハ海^ノの水^ハ
火^ノそり^ハふ^クな^れい^ハ定^ル家^ノの^ハ
町^ノを^ハ皆^ハ啼^キ 徒^ラぬ^クう^ラ
翁^ト 来^ル 邦^ニ 兆^ス 斗^ス 翁^ト 兆^ス 邦^ニ

疲^レ胃^ノの^ハま^らる^ク記^スあ^らる^クカ^ハあ^らる^ク
隣^トと^ハう^ラり^テ車^ノ川^ノさ^らひ^ト
う^ラる^ク人^トを^ハ松^ノ殺^ス垣^ノう^ラら^せん
い^ハや^ハ別^レの^ハ刀^ノさ^ら物^ト
せ^レり^ハあ^らふ^ク松^ノて^ハか^らう^ラさ^らす^ク
あ^らひ^ハ切^らる^ク死^スる^クひ^ハん^ト
若^シ夫^ノ有^ル的^ハ月^ノの^ハ釣^ルは^らる^ク
湖水^ノの^ハ秋^ノ乃^ハ比^レ良^ノの^ハ物^ト象^ト
翁^ト 来^ル 邦^ニ 兆^ス 来^ル 翁^ト 兆^ス 邦^ニ

采花や若草花をよみてあはれ
 布子もあはれ風の夕暮
 押合ふて揺ていふも月かり枕
 多しはれ雲はよるさあを
 一睡釈はくさ 忘の 長
 枇杷の右葉子木芽のふり
 邦 兆 来 翁 兆 邦

市中の物の白ひや夏の月
 あつしと門くの夢
 二麦草もたもた穂も
 一皮うらもくくもあ一枚
 山物に張もろくもあ自由
 多しとあもくくもあ長
 邦 兆 来 翁 兆 邦

美しうも煙さるる夕まくれ
 落の芽とりよ水鏡中りたる
 道心乃ちうつらぬのつゆの時
 能登の七尾乃冬を結るる
 魚の骨志あると北都をんく
 侍人へい小出門の 後
 之かき扇風と倒る女子在
 湯及竹の簀子鏡るる
 北 来 翁 北 来 翁 北 来 翁 北

荷虫の實を吹落る女鼠
 信やをそく奇みかふる
 猿引のこゝと世を絶る秋の月
 年小一中の世をえくるこ
 ふちかせ木は多し
 是徳をよふと悪はあはる
 追ふる子と出るの刀 持
 下川ちうる水たあふり
 北 来 翁 北 来 翁 北 来 翁 北

戸隣もも花かしの臺屋爰
夫とよりのりつら又はく
つをくとも鞋をゆる月夜に
蚕とあつひよ死し袖状
も終ふつらひるる糸房
ゆりみて蓋の合ぬ木槌
よる屋ふ暗く糸と糸やあり
いのち嬌と機糸の沙汰

糸 籬 北 糸 籬 北 糸 籬 北 糸 籬 北

さぬくふおろろりくも遠として
深世の早ち皆小町こ
何れも小粥さるあも洞くも
あつちるとあれも産ま板爰
よのひらふ風遠さる花の陰
を脱るつらぬ糸の結あさ

糸 籬 北 糸 籬 北 糸 籬 北 糸 籬 北

灰汁桶の帯をさうりこらうくと

つらつらうすうりて首襟は杖

新巻を愛あししるる月影小

あゝへて嬌し十の盃

ふ代経巻と袖と袖くぼして

帯のたまふもあゝを巻く

凡北

箱

野水

去来

翁

北

窓出して揺ふ余る暮の物

摩訶那うする根ふ雲のかき

いあゝあうりうとと喰くを風流

蛇の口を又とあうりては縁より

物さひらあゝつをれく体む日は

途せまうさ反よりの女

金襴と人よりのあゝあゝのせら

つらつらあゝあゝのあゝの月

来

あ

北

縁

あ

来

翁

北

河内の妹と交りぬや
何をとんぶもて夢中し
そ記とちる男に物念う夜居て
木芳の破蓋ふまうと書つ
海やう山陰傳ふ口十う
采ふは家れ持とく
あそこのつれおぬる水尻
旅の地をふりぬく

来 多 北 翁
来 多 北 翁
来 多 北 翁
来 多 北 翁
来 多 北 翁

ささきとて女の智恵もたつあ
何のひまの狼の啼
夕月散るれ萱根の虫のふる
人とりとて
うそつとて
又も大事れ部とぬ
境より田のまをそ
か茂の結をよき結

来 多 北 翁
来 多 北 翁
来 多 北 翁
来 多 北 翁
来 多 北 翁

物賣の扉のさく名あとして
 舟のやとりれはた迅速
 登脚のき徳のちれきよこま
 ちうらうくあふ葡萄のさうくらん
 系楸腹一とひ小ほみり
 春冬之月暖のころら
 水 来 兆 翁 舟

梅の葉鞠子のちれとけけ
 筆のさくさくさくさく
 雲をたふく山田の去持はあれや
 ちうらうきねめてちうらうき
 汗滴のちあきくさくさくさく
 二階のちあきくさくさくさく
 翁 舟 素男 孫碩 乙女

放やる鶉の籠を足くもせん
 福の葉ふ近の力あき風
 夏心れちしふ靴の跡
 内郷路くまの道あり
 卯の別れ葉ふふ小糸方
 すもも松の志のありけり
 萩のれすもれ札の徳あり
 萩のさるる百古鳥の一羽
 男 碩 翁 碩 男

懐ふもをちりし秋の月
 汐定ぬぬ卯れ海つ
 徳の柄ふまをうりし言
 一皮もさちりし葉の記
 春の日は休むる時
 店屋物くまの代り
 汗ぬくひ福の市れ縛の糸
 つかれせりと鶉の下
 丸北 辰 去来 北 正秀 来 半妙 去来

大膽ふらひ 扇連ぬきとく

州

身ハ 澄紙の糸糸あさ

芳

小刀の拾又ある 細工 箱

州

柳小火そのと 大年の夜

園風

あやとらあふ 俊と 次子の浦

猿籠

あひ井合を ちんちん 肩衣

州

ひきまうあつとら 破扇子

風

将る 澄紙とせて 将る 月石

籠

噴夢の隣とをき 椽付ひ

芳

流くもろあ 種あくえあ息

風

飛ふさ 絵と習ひる 合津巻

荒蒙

薄暮かゝる 竹の割り姑

史邦

花小又と 一の連しとあつに

野あ

雛の紋と 深る 長 風

羽紅

木のゆきハ汁も餘ささくさ

翁

酒日長宗女よきこふきこ

孫碩

旅人の風うき行まられて

曲名

ちんこもあつめを刀の鞘ヒキハタ

翁

月待く飯の代貴の司石

碩

靱白はく了れら子つこ

名

靱直る之也約め杖の末く

翁

あちこちくくる隙登る夏

碩

ハ世小孩路の浦湯の夕名書

名

中みも世のこころ山が

翁

ちあちとと一方入る一り

碩

細さの物より急はのりつ

名

物あちあふみの夜とせらうれて

翁

月ふる顔は神おのこあ

碩

秋風の船をよるる浪の音
厚水もや白子もあま月
ふゆはまの望れ一女田
巡礼をぬる月の陽貴
ゆるりも蝶は眠くを家あふ
みくはまの力人あふ
羅ふりといふも水くも
熊野をよるる浪の音

音 碩 音 音 碩 音 音

よまら紀の園ちか頰小
酒く元くもあふ女ん
双赤の目をぬくまて名あふ
飯の持佛おむるあふ
中く小去る小居しに聲もあふ
ふあふを望のあふあふ
将進くもぬ環の物とあふ
月長くもあふあふ月

音 音 音 音 音 音 音 音

花房のまわりにもあそびうらたて
 きくは方あるまの居の家
 一貫の海山うらとみちあり
 醫者の業を修ぬ分別
 花さけそより花のうらとみちあり
 花よさくうらとみちの山件
 翁 碩 翁 碩 翁 碩

梅うらふのまのまの山花
 可くふ報子の啼く山
 花を居とまれは透ふ花のて
 上のまのうらとみちのま
 音れ内をうらとみちのま
 花 翁 碩 翁 碩 翁 碩
 坡 令 翁 碩 翁 碩

水路へ葉のつらき女はうきこ
娘を望みし人の子をせぬ
まゝに思ひ伺しつゝある細考子
とくし一毎の悔ふぬ六月
新あしから味増え小舟向河原
初と云物見お袋のこり
終宵尾の持病と押へた
らんあやく針跡る名月

坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

袖丁小糸をとり地炎てる
あはれとお子おぢ合一好き
可成のほろこと碎て花の陰
門て押さく土生の念佛
あら風よま異のいふれと吹せし
あやあはるまゝ小朧つらふ
江戸のたねまのきりきり
すつらあまといれまかろいと候え

坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

あつくふ十段の心此後の喜
桐の末言く月さあらし
門メてだまりて舞ら面白さ
拾りて令て表くくさる
初年小女房の親子振舞て
まゝの世も淋ぬ浪人
法衣の湯浴と送る花燈
縄子とりりてまき麦の如き
翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

どのあも赤れ方小定をゆヶ
こゑよ歌女ゆく浪の紐あり
ふも啼一あしく小定さあり
未をの言乃果ぬ舞用
隣くも志くせ尺端とつ連て来
扇風の陰よもわら葉子並
翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡 翁 坡

空豆の花咲ふりり 春の縁

孤屋

臺の水鏡乃ちしる 薩川

箱

上弦を舞ふぬほのめ 龜

窓

三川と吹雪え 酒の空

利牛

燕取と雀も 燕ておぬる月

箱

とつりと 梅のころふ 枝風

屋

さうらと 新のちりり 椿

牛

曉の信事乃と 又するこ

水

婿とよめ 承ううめうう

屋

傍部のめきく 是みとや

箱

凡細く 安の馬の啼つり

水

水の流れと 波とるよ

牛

御汁つづのめ ぬりよくあつて

箱

茶の雲を ちかて 雲

屋

世をいそぐやう苑の静し
うれし柳を今よ別し
吾れ泣吹そぐしる月
ふらん丸ちて物さひ
あふを清と申れ
そつら坊とと
泣るれをさうふ
あつとれしる今と尋る

牛 水 屋 翁 斗 翁 屋

吾のまふ長く入て
せあを送りて
今此るあ吾乃
年首満と
息笑ふ紐文の
堪悲あしぬ
各月のるあ
下しつら

牛 翁 斗 翁 屋 翁 斗 翁 屋

此所の宿りの毎りともうなほ
 山の根際ぬ証うするし
 横雲ふりよしく風乃吹物と
 晒の上よ雲蒼さつる
 若んふと女子をさるる連きて
 余れまふあふ差多ふん
 年 年 年 年 年 年

翁

振毫此厚あをれと来 備
 降てるとやとて 町及る朝 登坡
 夏道う標の小をを携兼て 孤屋
 行元山よ月とるる 小 利斗
 好物の燐と絶るぬ杖の机 坡
 割束の安さよふの安さ 翁

細のよの迫つて解ふ事うけて
是より人々を二十八日
迎ふる事解ふ軍の志事こ
淡子の言ふ難状もせぬ
明くくじ籠指針と吹流で
痛く癖よる湯屋の音業
上至の二葉ささむも入の電
一よりよのぬりる内て意はる

牛 屋 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁

細賣のセツ斗と音つれく
埃小門あるみ千石 瓦
け流の縁若もを招月と花
秋ふぬくこのうりる事業
新白田れ書も落はく吾れ上
吹とくささる事とよりよ水
川鉄の帯しの水とあかあり
牛地の寺乃うらとさ教垣

牛 屋 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁 牛 坡 翁

丁物を口向のまへにうせ
壇の尻鴨の芭はさくこ
舞用小海世とまへにうせ
又河内列小娘 立性
ささくこと大崎もさつ
云原の好む状のたえ
申よくて侍業合乃信つ
築ちとまへにうせ
翁 坡 牛 尾 坡 翁 屋 牛

凡やまへにうせ
程の鳴子れ総とひう
ちうほくとまへにうせ
目尾まへの連の物ち
ささくこと大崎のまへに
瑞虎のちりとまへに

若れ去かれ口見れと於空し
日の如るまくの赤き冬空
下青を一船渡ふ歩明く
杉風 孤屋 翁

いづこを渡りさゆる荒れ
冬のまゝ此の赤あうら
大根のまゝぬ去ふ跡
翁 軍圃 孤屋 翁

八九間寛く有浮柳、の邪
馬の馬れ島ほる夢
神そのさる子と好の胆織ちて
内をささつく喚の振舞
そよみあうら知さうら月の色
物寄うれくれ空くあ
翁 軍圃 馬寛 孤屋 翁

混楢もとうとう瓦子吹れり
繰りぬるる龍父の借銭
旅指小籠く河へる旅刀
標を志すくをちや旅の渡
約束此小島一握臺ふ来て
十里斗の余亦くわうを
無此美ふ山路埋て知りるさ
わらぬう河ふと門の身付

里 覓 泊 符 里 覓 泊 符

河ふく後を沙汰あるに標坊と
中川と夢物とを系れ及是
有的ふちるる花の多え取ひて
りん事ふ狗か鞍のちく口
長をそ先居札う地寺又
修路の下向又居川下りと途
長根小小峯の伴るるいと
くらくそとそ其の晴るる雲

里 覓 泊 符 里 覓 泊 符

淨寺小一日稚小所の上

概の角乃をそら反費の院

淡川の牛小後とそらふこ

あれぬ筑子をかると地院

月待小侍雲の赤梅ひ

紅顔の三葉乃らふ系うぬく

ひきて来く酒小も根もむの夢

伴僧そらら系ゆけね

里

菟

浜

菟

里

菟

浜

菟

影やふ長刀坂の冬北風

まがさ小早れら風連うき

らそらむふそねらたをやうこ

そ河と火入ふそ海を薫

花をそや妙らぬ春風をふれて

漱うらの霞の陽春のあ

里

菟

菟

浜

菟

里

猿の義小のれさるる雲の松蔭小

浜園

日ち空をいれと静ある雲

翁

水かゝる池の中より及りり

支考

松竹よりしるは来といづく

惟翁

鶉うりうるとやうしと雲の月

翁

海りのあふふんせたる秋

考

夕之志まひしそめて逝らるる猿の急

翁

空や採のこ癖とあそびのあり

翁

舞うまてみゆもせはふ物終

考

中玉より此状の昔友右

翁

朝の此日いと人やう振舞ぬを

翁

空の羽織うまうゝ 翁

考

そまふんしあまを雲の根楓

翁

山と門なる有明の月

翁

初嵐留のふ乃か多まのり
あ際光る 後の小籠
んて厚る紀之野ハ花の頃かて
そら持もこりふいつく水き日
ちち風の又酒か如小ふあり
つづのふ小籠を大車かづら
後の内帯を今夜屋敷うら
境の沙粒もあさとせきぬ
考 翁 考 翁 考 翁 考 翁

大世川あか二日ある書れ 境
香かきさつあし中のとる屋
あさ粒の糸をた皆切あ航
奥の世並をを年の代
酒より七番れをさ月見して
茶籠取を産の一面
定らぬ娘のかるた志川あ
探汗のこまらるあさ方れ後
考 翁 考 翁 考 翁 考 翁

鳥の跡をたづねてはるる松の風
 左に雲の奥ふすろ
 弟揃もろあちよーそそ揃
 うらまて市井中を押合
 此のうらま生ひ死のちもあて
 鴨の沈乃りまこぬる思慕
 然 然 然 考 考

籟

夏の夜や涼むの〜次〜也
 雲のこころと道に極は
 雲をいひその影ふき入る
 古き草の跡ふ及故知也
 月影の香も色よる雲の色
 志まらぬ 跡を命る響るる
 曲翠 籟 籟 考 考

猪と猪鬣の如く追みし
山うら石ふ名と書し
版摺ある面桐ふそし
書て上支と書し
お色くふふ小詠く橋の妻
持佛の顔ふ夕々し
平畦小菜と前立し田畑
秋風りし門の石風呂

翠 考 翁 考 然 言 翠

一り引て張ひ物る月の顔
尾張くはきしえの若菜
候ぬのとうは花ふりて
正月の驪もよき
春風ふ書後のはり物と
藪く村へ如る書
寝兼ぬ舞も習も
何さの時を山伏よ

言 翁 考 然 言 翠 考 翁 考 然 言 翠

笹色しと梅ふはあつる狭葉
 言
 巖よりさぐる卯月ゆく末
 言
 お宿と夜先ふつる久末の所
 考
 隙の目細ふ名乃を重
 然
 吾のころをせぬ酒のつを
 翠
 吾のくのかつと舟へ航する
 言
 對付し又お來する月の言
 箱
 そろくつりく盆の上鶴流
 考

法華はる四糸れ角の河原所
 然
 言漸とあつる表一固
 翠
 今此る小徳とんうらと橋の上
 言
 大なるお陸のたんふやあ
 然
 望ある花あも能およせ
 考
 強うけはえしと藤柳の下
 言

歩よりて花入探花梅 梅

公洞

降るひまの袖名此若 照棠

目ふくぬばまう音とくにて 其角

羽織のよふふちを繕ふ 其山

夕月の及ふまじしかんか扇 柳隣

心代さくくおせりしと 張吉

岡ヤシ小ぬきぬさひうら槌の音 棠

音くやあかろ梁う親 角

是れさふき糸様と申て花の花 吾

木立を考て虫と泊瀬の字案 翁

下張の反故んくく物くく 山

つめくぬ猫の身と初ま来る 隣

ひらうや繕ふくく色紙の色 棠

硯法度と名やせうく 角

夜のむ急のかいせうあつこえん
ふすの秋とささるひ 唇
まいつと變とそやと朝の月
らふとそ業ふ遠サカレ殺
急ある和尙も友と秋の宿
言つんよあを揚る葉戸樵
山鳥れつうき 師を静し
新うかろん 念合歡のや言

山 翁 角 棠 吉 山 翁 角 棠 隣 翁

うけじうひ 残るる麻のつと返あ
ふらぬ舟ふ登の汐釣
そま也りそ曹洞宗れさうりて
焦とふそふいこくもと鏡
そぬあう此を人ふ志を志
葉 中 分 かん 傘
孫とそ早に候あてそ言の月
淡とそ先の夢ひらと丁

山 棠 翁 角 棠 隣 吉 山

松茸と近江路うらハ沃山小
 是やふ子ハ下くニ有
 花のりあめくーとさう揚き妃
 付じと申てたらき 柳の又
 六てあの新乃踏く之経
 角 杏 翁 棠 山 隣

多くても有る物と草履椒
 提ておもひさ 此れ新 酒堂
 善れ月楸のあ月を打よせて 筑紫
 坊さかーら此はふきささ 徳久
 松山の嶽を蹴踏の味海り 棠
 糖好の山出と下民川 翁

龍ひ日れ清みりしる小雲珠
あまを物んで流る水子
ととふ云々の句を拵せもや
翠々舞ふんそく下か茂の結露
空を微と山くさる籠の中かり
一心を教のむ風のかるこま
目のをりふん石を志すやて
こゆる中ふ鏡あややる

あ 雲 翁 翁 翁 翁 翁 翁

踏まらふ海流の巻れ釣月夜
那知の波山乃東に雲さ空
らるるちとらりまらむはみた
あつらひ小馬士の海へ花と
所中かの巻針ハ赤くさす人にして
吹も志らるる花かあやる
草は袋小地を踏まは杖の象
伝へんらるりの古もやの月

あ 雲 翁 翁 翁 翁 翁 翁

玉水の子苗とろけを懐しや
こゝろ迹うらも証報歩ある
山体と切てうけしる園のあ
徑もいひをあゝぬ世れ中
附き合を皆とそめく吾のじ
うらうらとわき海し
系物て初ある礼ふ町のわき
たてたあてある及の穴日

あ 棠 翁 棠 翁 翁 翁 翁

機揚て水田も暮る人の跡
延片荷子線うけり
あけまの池裡緋の宕木線帯
ごと抱へらひ去るの及らお
茶女唄人うらぬうらぬえん
雛子乃ほろくおきぬあまき

あ 棠 翁 棠 翁 翁 翁 翁

洗足小菖と名ればくき外

酒菖

総タテ皴あくぶ冬ひきの里

許六

鶴ミツサハ雛階子の徳と清ひ来て

翁

車くらゝを伝七まもつ川

鼠菖

月の文氷も残る小餅賣

六

薬地長保小典菜の響

菖

お小寺牡丹の花れカ望み

菖

椀の蓋とる落小竹の子

翁

物成乃カ新堂法カまカ枕

菖

昔カ咄小燈カ良カ流カるカ

七

るカぬカくカるカ骨乃カ陣カのカ痛カとカ考カ

翁

東カ進子の月カをカすカもカるカ所

菖

まカるカ鶴カりカれカ横カ小カ室カをカまカのカ喜カ

六

姉カのカ柵カ杖カ逆カ足カ小カはカく

菖

系を此批訂志を記す
江ささかろ星川の橋
村を苑田面のまはまを
塚のつらびのなるる原
あも信の所ふめくう河まの末
今を敷きし今川のお
うづりけ後撰の風と後集
又まのうらうらまゆり

崇 六 翁 崇 六 翁 崇 六 翁 崇

朝あふ信海りくる藍の巻
よふのれし狗かろるまの粉
るかこと信志つる村の橋
月あふ髪と信を採りし
あさ月して石のそまを
先換かふる年の物あを
うらまると門の風ふる
言を親書ふかき海と見る

崇 六 翁 崇 六 翁 崇 六 翁 崇

今をやる茶畑と云つれを
 茶畑の縁ふれも隠さく
 茶畑小舟中り夢の中
 日と茶畑ある二月餅り
 和茶小舟路の蛇のとれきて
 納樟クノギありやく文川のとれ

茶 翁 六 茶 翁 茶

口切小場の茶とありき
 筆のんき茶の妙をね
 山うれ茶小舟茶と茶もは
 杖の登る乃る茶の破
 旅人の物小舟の明りあり
 又戸と揚小舟の縁あり

翁
 支梁
 茶葉
 利合
 酒壺
 出水

鶏の玉子此好と毒を移す
 竹と踏むとく
 こころは六田の柳あり植て
 掛草はまろく赤土をの汁
 くらうあさるめも志厚の蝶の卵
 環りあふる穴坊の極
 ちくくと鐵筋しる石の上
 酒ても食のあつた月

桐葉
 竹
 梁
 翁
 合
 堂
 水
 葉

河雲の長門のふと秋くらき
 色移ふ朽らん一棟の徳
 西日ひをれを店のもまな
 昔の二葉乃前そはのちく
 都とを去年の行脚ふ思れて
 兎よりさうく新廻堂の蒼
 咲そめて思ふもよりも枯るる
 きのの洞々枇杷の蔭又

堂
 梁
 竹
 葉
 堂
 合
 翁
 葉

凡早してトナス鑽りもあき旅の者
 清き水は流連とまらぬ所
 日暮ふ鐘賣の聲とさき
 みよしの岸乃 羽の川口
 水つぎに結の糸ふるほどし
 とききキハヒききしる門前の坂
 皮剥ハキの地をたて喰ひ音の月
 と毛吹く白ぼろの靴
 賣 符 菜 合 梁 壺 竹 賣

管絃の流しはさる竹篾
 古刀もらふ斗二のあき
 拍子も兼 節小あらし
 盆小の舞る 丸菜の敷
 瓦並 沙堂の路に人あ
 賣と菜籠の端を端
 合 賣 梁 菜 壺 竹

荊栂や水田のく人乃秋の雲

酒壺

そきうら日小志ろりむ厚

鼠竹

衣うの栂を馬の定うりて

翁

畫其 草の纏る 及のより返

小籠

古戦場月も静ふはさつり

鼠蒙

志ろり 見送る ちかきぬの籠

壺

けし汐の門乃栂小赤あき

竹

高を何れを栂小八虹

翁

是し葉小肩やとよはるるちか引

籠

水仙好き 彦阿の傳子

蒙

年つとれみふ枕の花きん 酒堂
孫ふふあしる 琵琶の末し 素堂
春の月よく 梅のあふるうで 翁

花のうきかゝるを花めつじや 翁今
折るやをうん危の糸帯本 翁格
七夕れはらる物のこひくして 翁

